(財)三重こどもわかもの育成財団　機関誌
～親子で話そう　今日の出来事　一日一回！～

わかすぎ

第124号
2009
平成21年6月発行

決めのポーズがカッコイイ

唐人踊り

こんな風に吹くんやに!!

この大きなラッパは・・・

INDEX

02　子ども達を魅了する大人シリーズ①
決めのポーズがカッコイイ“唐人踊り”
03　平成21年度事業計画
04　保育施設での外国人児童の受け入れ状況に関する調査
06　わかすぎ時評10
教育は、子どもの可能性を伸ばすこと
08　財団からのお知らせ
編集後記

〈編集発行〉
(財)三重こどもわかもの育成財団
〒515-0054　三重県松阪市立野町1291
みえこどもの城内
TEL：0598-22-4911
FAX：0598-23-7792
URL：http://www.mie-cc.or.jp

子ども達を魅了する大人シリーズ 1

決めのポーズがカッコイイ“唐人踊り”

今回の124号から、＜子ども達を魅了する大人＞シリーズを企画しました。本稿は、1636年頃から津市分部町（わけべまち）で続いている“唐人踊り”です。私は“唐人踊り”を初めて見た瞬間、唐人のデフォルメされた個性的なお面と衣装に、「分部町の唐人さん」の姿を目の当たりにした思いがありました。今回は、『子ども唐人・唐人踊りを継ぐ会』世話役の小菅雅司さんからお話を伺いました。

笛の面

Q 週休２日制は子どもの活動範囲が広がるきっかけ、伝承者を育てるきっかけになりました？

藤堂高虎の領地であった津市の大祭は、1635年に２代目藤堂高次が津八幡宮信仰と町が賑わうねらいで始めたといわれています。江戸時代前期の津八幡宮祭礼絵巻物には、面を被らず黒い服を着た南蛮人のような衣装姿の行列だけで、踊りは描かれていません。江戸時代後期の絵巻物には、現在とほぼ同じ衣装でラッパ・笛・太鼓・鉦（かね）を演奏する姿が描かれています。“唐人踊り”は“唐人”の衣装と面を付けた仮装行列で進み、途中の要所で“唐人踊り”を披露します。

1956年から始まった津まつりでは“唐人踊り”は定番になっています。当時は、子どもは参加していませんでした。しかし、1992年から週休２日制になり、土曜日に子ども達のさまざまな地域活動の一つとして地元の小学校長の提案で、小学生対象“子ども唐人踊り”が加わりました。お面を付けて踊る小学生は可愛らしく、“唐人踊り”の中高生以上の踊りでは、ビシッビシッとポーズが決まって溌剌（はつらつ）さが一段と際立ちます。小学生は青年達から踊りや笛以外の鳴り物（太鼓・鉦・ラッパ）を教えてもらって演奏します。

分部町の人達が時代の流れに沿って工夫して、衣装や面、お囃子を取り入れ、更に、踊りを工夫して現在の“唐人踊り”のカタチがあります。まさに、芸能は生き物です。

以前、三重大学の共通教育で“唐人踊り”を青年部の３人と一緒に紹介させてもらいました。踊りの指導、楽隊の鳴り物の指導、面の制作の指導です。受講生と年齢差の少ない“唐人踊り”の青年達ですが、カッコいい唐人踊りのポーズを決めるコツを教える姿勢に応えて、学生は素直に熱心に取り組みましたね。大学生でも、小学生が憧れる青年のカッコイイ“唐人踊り”に対する思いは同じですかね。

しかし、小学生たちは仲間と一緒に踊る“唐人踊り”の中で、憧れの先輩を目指して独自の工夫を重ねますが、大学生達は限られた練習回数でもあり、真似で終わりましたね。

津八幡宮に奉納の唐人踊り

傘持ちの面

Q どのような所で練習をするのでしょう？

平成３年に三重県無形民俗文化財に指定されましたが、今でも、祭りの半月前から中学生以上の練習は路上です。地域の皆さんに見守られながらこれからも引き継いでいきます。

（文責：中西智子）

※唐人踊りについては、「唐人さんの家」ホームページをご覧ください。

平成21年度事業計画

■ 青少年育成事業「第２回みえ青少年伝統芸能オンステージ」

開催日：平成21年11月１日（日）
会　場：松阪コミュニティ文化センター

県内で地域文化の伝承に取り組んでいる人達を応援したいという主旨で実施している青少年育成事業です。今年度は志摩市磯部町に伝わる九鬼水軍の出陣太鼓「磯部楽打ち」をはじめ、「伊勢市宮後子ども木遣保存会」による木遣り歌など、中・高校生が活躍する三重ならではの伝統芸能をご披露いただきます。

■**主 催**　財団法人三重こどもわかもの育成財団（みえこどもの城）・松阪市
■**協 力**　松阪市青少年育成市民会議

「磯部楽打ち」（志摩市）

■ 地域活動支援事業の実施（平成21年７月上旬～平成22年２月末日までの期間）

平成16年度から地域の先進的青少年育成事業に対して支援しています。昨年度は、13の団体が事業を行いました。本年度も同様に青少年の健全育成運動の推進を図るため事業を行っていきます。

昨年度実施した紀宝町青少年育成町民会議からは、木造和船に三反の帆を張り昔ながらの川下りを体験する様子が報告されました。

鳥羽市青少年育成市民会議からは、凧作りには50人を超える参加者、凧あげ当日には県外からの参加者も含め約250人が集まり、世代間を越えた取り組みになってきている様子が報告されました。

桑名市青少年育成市民会議からは、近年、様々な国や地域から来た人たちとの地域交流会で「『人権・芸術・スポーツ』を通じて交流を深め、豊かな人間性の育み、社会性や規範意識を身につけるなどの人間形成に大きな成果があったという報告がされました。

写真／紀宝町青少年育成町民会議 提供

三反帆の舟で川下りを体験

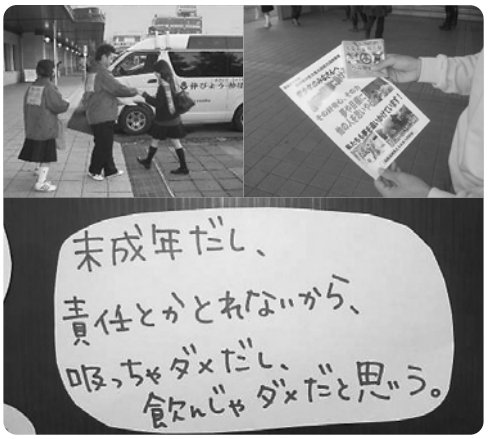
■ 高校生世代活用事業の実施（平成21年７月下旬～平成22年１月末日までの期間）

青少年の豊かな発想を、同世代の青少年への非行防止活動に活用しようという主旨で実施する事業です。非行防止を同世代の青少年がアピールする効果を目的とした啓発活動であり、毎年それぞれに工夫したトレーナーやジャケットを着用し、柔軟な発想のデザインで作成したチラシやテッシュを配布しています。

出勤時間帯に近鉄津駅前で活動を行なった高田高等学校「馬とふれあう同好会」は、活発なアピールにより１時間弱で、1,000枚のチラシを配布しました。（写真：右上）

熊野市のボランティアグループ「白夜」は、商店街の祭りに訪れた青少年に声を掛け、非行防止への思いを用紙に書いてもらい、それをボードに貼り付ける発想で、啓発活動を通行人にアピールしました。（写真：下）

平成20年度まで県の委託事業「青少年生き生き創造力活用事業」として実施してきましたが、平成21年度からは、財団の事業として「高校生世代活用事業」と名称を変更し、さらに啓発活動が世代間を越えた広がりを持つ事業とするため、各地域の青少年育成市町民会議と連携して実施します。



商店街や駅前広場などでの活動の様子

保育施設での外国人児童の受け入れ状況に関する調査

みえ少年問題研究会　楠　本　　孝
三重短期大学准教授

三重県では近年外国人登録者数が急増し、その滞在期間も長期化して定住化の傾向を見せるなかで、日本の保育施設に預けられる外国籍の子どもが増加しているが、その正確な状況把握は行われていない。本調査は、外国籍の子どもを受け入れている保育施設（認可保育所及び公立幼稚園）が抱えている問題点を明らかにし、どのような対策が必要かを検討するための資料を得ることを目的として実施した。

第１回調査は東海地域の経済が好調であった2007年12月から2008年１月にかけて実施し、第２回調査は2008年９月以降の急激な景気後退の最中の2009年１月から２月にかけて実施したもので、現在の不況が外国人の子育て環境にどんな影響を及ぼしているかを知る上でも意義があろう。なお、調査エリアを北・中勢地域の９市（いなべ、桑名、四日市、鈴鹿、亀山、伊賀、津、松阪、伊勢）に限定した。この９市で県内外国人登録者数の90％をカバーすることができ、これによって三重県の全体像を推し量ることができると考えたからである。

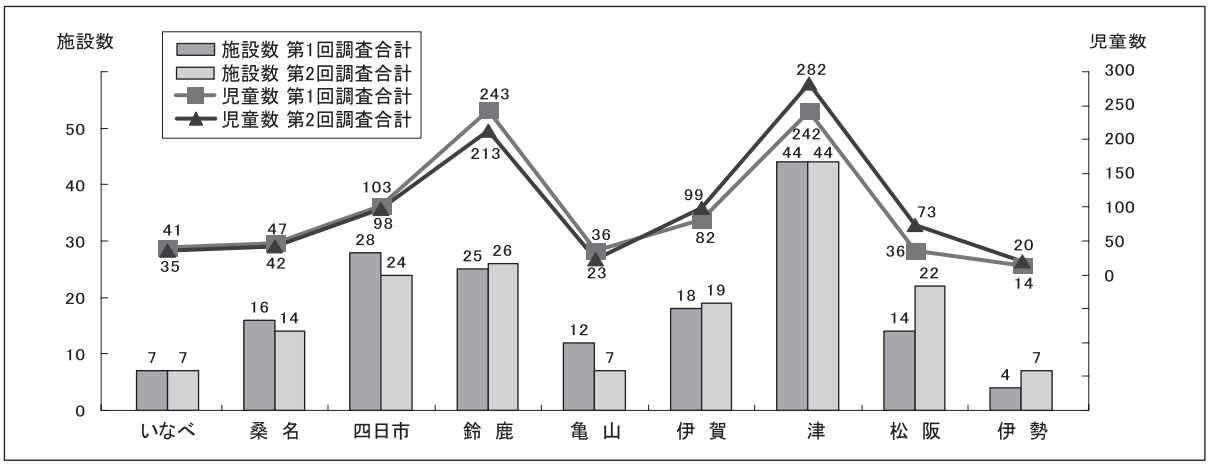
■ 調査概要

調査の結果、表のように、この1年間に、外国人児童が在籍する施設数は168から170へと微増にとどまるが、在籍児童数は844人から885人へと41人（4.9％）の増加となっており、特に保育所での増加（50人、6.7％）が顕著である。不景気の影響で保育園を退園する外国人児童が増えているとの報道があったが、調査結果はその逆になっている。理由は明確でないが、外国人保育施設に預けていた子どもを費用の安い認可保育所に預けるようになったということも考えられる。

【表】調査概要

	第１回調査			第２回調査		
	保育所	幼稚園	合　計	保育所	幼稚園	合　計
調査対象施設数	293	155	448	297	150	447
調査票回収数	216	105	321	219	98	317
回収率	73.7%	67.7%	71.7%	73.7%	65.3%	70.9%
外国人児童が在籍する施設数	133	35	168	139	31	170
回収数に占める比率	61.6%	33.3%	52.3%	63.5%	31.6%	53.8%
在籍する外国人児童数	747	97	844	797	88	885

【グラフ】自治体別外国人児童在籍施設数及び在籍児童数



【グラフ】自治体別外国人児童在籍施設数及び在籍児童数で見ると、施設数が最も多かったのは、第１回調査でも第２回調査でも津であった。第１回調査では続いて四日市、鈴鹿となっていたが、第２回調査では鈴鹿、四日市の順になっている。外国人児童数が最も多いのは、第１回調査では鈴鹿、僅かの

差で津となっていたが、第２回調査では津が鈴鹿を抜いて、しかも大差をつけている。鈴鹿で30人減少し、津で40人増加している。他には、松阪で37人、伊賀で17人増加したことと、亀山で13人、四日市で５人減少しているが、全体に、北勢地域で減少し、中勢地域で増加傾向である。

■ 第２回調査結果から見える保育施設の外国人児童への対応

近時「多文化共生」（自国の文化を絶対化しないで、異質な文化の理解を通して自らの文化をも豊かにしていくという考え方）の視点の重要性も指摘されている。また、外国籍の子どもの保育には、日本文化への適応を手助けするという側面がある。しかし、子どもを保育施設に預けているニューカマーの中には、日本語能力が充分でないために、施設職員と保護者との意思疎通に困難をきたす場合等があることから、以下の４点について調査した。

１．通常の意思疎通手段である配布物に関して、施設から保護者への配慮について

① 施設によっては、母語に翻訳したもの、ローマ字表記やルビを振ったものを配布している。こうした配布物に何らかの配慮をしている施設が、保育所では約６割に達している。それに対して、幼稚園では４分の１程度であり、外国人児童が在籍している幼稚園に限っても、何らかの配慮をしている施設は、38.7％に止まっている。

② 文書自体には特別な配慮をしていないが、配布の際に口頭で趣旨を説明しているという施設は保育所で38.8％、幼稚園で19.4％もあり、特別な配慮はしていないという施設は、保育所で12.8％、幼稚園で13.3％と少ない。

２．子どもが熱を出したときなど保護者と緊急に連絡を取る必要が生じた場合などの配慮について

① 母語のできる職員がいる施設の割合は、保育所、幼稚園ともかなり低く。外部の通訳サービスの利用、保護者の就業先に通訳を依頼するなどを含めても緊急の連絡方法に配慮が不十分である。

② 特別な配慮をしていない施設が保育所で33.8％、幼稚園で30.6％あるが、その多くは外国人児童が在籍していない施設である。

３．多文化共生についての配慮について

① 多文化共生に関する職員の研修をしている施設が保育所で20.1％、幼稚園で19.4％あり、研修はしていないが普段から外国人の文化に配慮するよう心がけることを申し合わせている施設が保育所で41.1％、幼稚園で50.0％あるなど、かなり高い割合で多文化共生への配慮がなされている。「むしろ日本文化を理解してもらうようにしている」との回答は、保育所で6.8％、幼稚園で4.1％と少ない。

② 「特別な配慮はしていない」とする施設が、保育所で22.4％とやや高いのに対し、幼稚園では12.2％に止まり、保育所より幼稚園で多文化共生への配慮が広まっているといえるだろう。

４．外国人児童の小学校就学へ繋げる配慮について

「配慮をしている」とした施設は、保育所42.0％、幼稚園36.7％、「配慮していない」とした施設は、保育所24.7％、幼稚園13.3％であった。外国人児童の在籍する施設に限れば、「配慮している」施設は、保育所では139施設のうち86施設（61.9％）に止まるが、幼稚園では31施設のうち25施設（80.6％）に達している。多くの外国人児童が幼稚園より保育所に預けられていることを考えれば、保育所において小学校への就学に繋げる配慮がいっそうなされることが望まれる。

さいごに

この２回の調査を通じて、現場の変化に行政の支援が追いついていないことが改めて浮き彫りになった。そんな中で努力と工夫を重ねておられる各施設の職員の方々に敬意を表するとともに、多忙にもかかわらず調査に協力頂いたことに感謝したい。

編集部から

以上の内容は、財団法人三重こどもわかのもの育成財団助成事業「平成19年度・20年度青少年育成調査研究事業」報告からの抜粋です。詳しくは、上野達彦代表編集「みえ少年問題研究会『保育施設での外国人児童の受け入れ状況に関する報告書』2009年３月発行」がありますので、当財団までお問い合わせください。

わかすき
時評 10

教育は、子どもの可能性を伸ばすこと

畑　康裕 校長
（株式会社ウィッツ取締役、
NPO法人 教育支援協会 理事）

平成17年に内閣府・文部科学省から『伊賀市意育教育特区』として認められ、三重県青山町（現在は伊賀市）へ全寮制で日本初の株式会社立高校“ウィッツ青山学園高等学校”が開校しました（全寮制を柱に、通信制と旧青山地区在住の生徒を対象とした一部通学制）。

ウィッツ青山学園高等学校は人育て・人づくりのあり方として【意育教育（「共育」）】を主張しています。耳慣れない言葉ですが、畑 康裕校長先生から教育のねらいについて伺いました。

■「how to do（どのようにしてやるか）」ではなく「why to do（なぜするのか）」を追求する教育

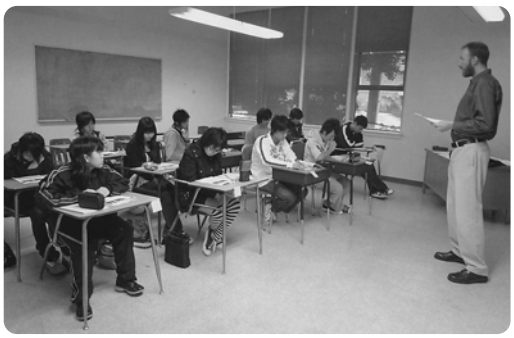
校長：「意育」は、個性や多様性が認められ、今より一層それぞれの目の前に広がる選択肢が増えていく中で、自分に自信を持って、悔いのない、ハッピーな人生を送ることが出来る力を身に付けることをめざして、「自ら選択し、決断できる力を身に付けることを目的とした教育」として、私たちは「意育」を掲げています。株式会社ということで話題になっているようですが、たまたま寮のある高校分野では日本で最初にできたということ「私学助成金のない私立学校」です。1999年にNPO法（教育を含む10分野）が成立しまして、教育分野では第一号認証のNPO法人教育支援協会と協働して設立しました。

これからは民間人がもっともっと教育に携わっていく世の中になるだろうということで、当時は文部科学省の政策審議官だった寺脇 研さんと一緒に。彼には開校記念講演会にはパネリストとしてきていただきました。

Q：ウィッツ青山学園高等学校では、生徒と先生が一緒に寮生活ですよね？

校長：まず私自身が教育の原点に戻り、多感な時期を過ごす生徒一人一人と逃げることなく向き合う現場にするということです。教育の意味をとやかく議論するより、教える者も教わる者も、互いに成長途上にある生身の人間同士ですから、お互いに目を逸らさず、避け合うことなく、向い合う。これが教育の原点ではないかと信じるのです。ここでは私を含め、専任スタッフ全員が学校の寮に生徒たちと共に暮らしています。一人の成長を一人が担うって言うのは難しいことですよね。生徒と担任の関係ではなく、教育っていうのはやっぱりみんなで背負わないとね。

先生と生徒の全員が寮生活で共に成長する、ウィッツ青山学園は「共育の場」ということですね。先日、地域の方たちとの交流も活発だと感じたことがあります。ここから165号線へ出たところに、地域の人が作った野菜・花・お餅などを売るお店がありますね。寄って買い物をした時、お店の人から「どこから来たの？」と立ち話になって、ウィッツ青山の生徒の話になりました。地域の人達は若者と交流する機会ができて喜んでらっしゃる様子は、とても嬉しかったです。



授業風景

■ 生活家族からの教育家族へ

校長：そうでしたか。教育がこの国でも機能していたであろう時期がいくつかあって、その頃っていうのは、ものすごく家庭・地域・学校っていうのはちゃんと機能していて、みんなで子どもの成長を担っていた。地域が子どもの育つ力を高めていたんですね。学校は子ど

も達だけでなく地域の人達も、ある部分核になっていて、地域や家庭を結ぶコーディネータだったんですね。教師が一人の力で教育が担えるっていうのは大きな誤解っていうか、錯覚だと思っています。

教育の価値観が多様化多様化って、最近よくいうんですけれども、その価値観なんて全然多様化していないと僕は思う。1970年、万国博覧会が開催されましたが、この辺りを境に、高校進学率も90％になり、三種の神器（冷蔵庫・テレビ・洗濯機）が家庭に入った頃から、価値観は一つになった。要は点数を取っていい高校に行って、いい大学に入って、いい会社に入って、みたいなカタチに固まったような気がするんですね。

この国は生活家族であったのに、急に教育家族になった。物質的に豊かになるためには、1970年から後は僕の検証では価値観は硬直化して、教育の価値観はいい点数を取って、いい学校に行って、いい会社に入る、そこだけのためのように家族が成立してね。地域も全てがいい会社へ行くことが物質的に豊かな生活が保障されるという、そんなふうな世の中になったんだと思ってしまった。僕は1959年生まれで、まさしくある面、1970年は小学校４年生でしたから、「勉強せい、勉強せい」って、「勉強する理由は何？」って言ったら、「いい学校へ行くんや」とね。経済が豊かになり、どんどん右肩上がりに子どもも増えて、1970年を境に物中心の家族に変わっちゃったんじゃないかな…。

■ 若者は自分の持つ可能性に目覚めて、自信を持って未来へ旅立つ

校長：「△△んとこの次男は勉強できへんけど、小学生のくせに植木切らしたらものすごく上手い。あれはええ植木職人になるで」とかね。「あそこの三男は不器用だけど勉強させたらすごいらしいわ、全く役にたたんけど、末は博士か大臣になるんちゃうか」みたいに、その頃の大人にはいろいろな価値観があって、子どもが自分の役割認識も含めて、本人自身が将来どうやって生きていこうかと、子どもの気持を引き出すように育てた。

大人には子どもは宝物です。子ども各人の価値において一人前にするのが大人の役割であり、責任であることを実践していた時期があったと思う。本来この国は“大人みんなで育てる”と言う、子どもが未来へ旅立つ教育力を共有していた。私は帰国子女の講師を半年日本、半年海外って形でやっていたものですから、ヨーロッパやアメリカの教育と日本と、日本人学校で全然違っていることについて、これはどうなっているんだと考えた。教育と言う一つの言葉でくくるけど、国家によって、また同じ日本の学校でも海外にある日本人学校のコミュニティとか、我が国の教育が壊れていっているんじゃないかと言う思いが、ものすごく強くなっていました。

Q：教育が壊れていく？ ですか。

校長：はい、壊れていくと思いましたね。なんかね、受験、受験ってこんなに一つの価値観に走っていくのはなぜだろうか、とね。その部分ではやっぱり日本に半年帰ってくるたびに怖くなっていました。このまま走ったら、どんな世の中になるんだろうとね。そんな時、たまたま学校を企画してみないかというとんでもない話が僕のところに来たんです。

Q：学校を企画？

校長：構造改革特区法を使って、学校を作ることを企画する話です。ご存知のように小泉内閣による構造改革特区ができるまでの学校は、国立と公立と学校法人（私学）ですね。学校法人を作るには莫大なお金がいるんです。今だいぶ規制緩和されてきましたけれどね。自前の校舎、自前の土地、資産、早い話がうん十億円と言う資産をもっている方でないと、できるようなものではなかったわけです。だから、単純に言えば、民間人、一人の思いで学校を作るなんてことはありえなかったけれど、構造改革特区では理屈の上ではそれが実現

平成20年度 10日間のロサンゼルス研修旅行

できるようになった経済特区です。

僕も最初は学校を作るって、お話を伺ったときは学校を企画できるとか全く分からなかったけれど、勉強したら、この法律使ったら株式会社でも学校教育法で学校を作ることが可能であることが判った。ただネックは補助金が出ないことです。だけど少なくともこういうご縁が重なったら、ここのすばらしい校舎を使えて企画できるって言うのは僕にとってすごい大きな体験値っていうふうに思いました。それで、喜んで引き受けますと言うことで、スタートしました。

平成20年度 卒業式の様子

さいごに

畑校長は、「子どもの教育がお父さん・お母さんだけのものにどんどん変化してしまった背景は絶対に見逃せないと思う。まず私自身が教育の原点に戻り、多感な時期を過ごす生徒一人一人と逃げることなく向き合う現場にするということです。」とおっしゃいました。ウィッツ青山学園高等学校のブログに「校長DIARY」が載っています。ご覧いただければ、と思います。（文責　中西智子）

財団からのお知らせ

中学生のメッセージ 2009

第31回 少年の主張 三重県大会

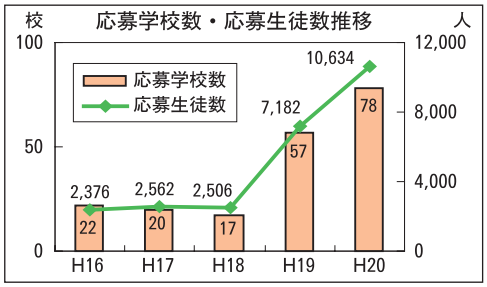
中学生が日ごろ感じていることや考えていることを広く県民に主張することにより、青少年が自分の生き方や社会との関わりを考えるとともに、青少年に対する県民の理解・関心を深めることを目的として、1979 年（昭和 54 年）の国際児童年を記念して始められ、今年で 31 回目を迎えます。

平成 21 年度は、津地区（津市）で実施し、今後の開催場所も以下の予定で準備を進めています。

県民の皆さまのご観覧をお待ちしています。

- 開催日時：平成 21 年 8 月 22 日（土）　13：00 ～ 16：30（予定）
- 開催場所：津リージョンプラザ　お城ホール（津市西丸之内 23 番 1 号）
- 主　　催：財団法人三重こどもわかもの育成財団・三重県
- 協　　力：津市青少年育成市民会議
- 後　　援：三重県教育委員会・三重県小中学校長会・三重県 PTA 連合会・三重県私学協会
  三重県教職員組合・NHK 津放送局・三重テレビ放送株式会社

※詳細については、当財団ホームページ（http://www.mie-cc.or.jp/ikuseihp/）を参照してください。



●来年度以降の「少年の主張三重県大会」の開催場所

平成22年度　鈴亀地区（鈴鹿市・亀山市）
平成23年度　伊賀地区（伊賀市・名張市）
平成24年度　松阪地方（松阪市・明和町・多気町・大台町）
平成25年度　紀北地区（尾鷲市・紀北町）
平成26年度　桑員地区（桑名市・いなべ市・東員町・木曽岬町）
平成27年度　紀南地区（熊野市・御浜町・紀宝町）

編集後記

本誌『わかすぎ 第124号』の編集過程で、「風土が育てる」という言葉が浮かびました。音楽・建築・文学・食べ物など、我々は「風土」との関係で、自然や風土を受け入れながら過去・現在・未来があります。20年前には思いも付かなかった電子マネーの日常的な利用がありますが、いつの時代にも、子ども達の育ちの基軸となるのは、人と人の交流だと思います。「風土が育てる」という言葉を実感しました。

『わかすぎ』編集長　中西智子

再生紙を使用しています。